

辺野古通信

第62号 2017年10月24日

新宿駅東口で約200人で辺野古アピール(9/24)



横須賀集会で1700人に訴える山城さん(10/1)

発行: 沖縄の自立解放闘争に連帯し、反安保を闘う連続講座(沖縄講座@横浜)
沖縄講座 HP <http://www.7b.biglobe.ne.jp/~okinawa-koza/>

衆議院議員半減！ 揺るがぬ民意を！

■「反辺野古 民意揺るがず」(沖縄タイムス)「『オール沖縄』3勝 それでも新基地造るのか」(琉球新報) -10/22 投開票の衆議院選挙の結果を受けた翌日の沖縄地元紙の社説の見出しだ。出遅れが響いて敗れた4区の仲里利信さんを除いて、普天間を抱える宜野湾市、辺野古を抱える名護市、高江のある東村を含む1区から3区は、「オール沖縄」の現職候補が勝利した。とりわけ2区、3区は大差をつけて自民党候補の比例復活も阻止し、沖縄選出の自民党国会議員は4人から2人に半減した。全国的には野党候補の乱立で与党が国会の3分の2を占めたことで安倍政権の沖縄政策がより強硬になることが危惧されているが、沖縄の民意を見誤ってはならない。■9/11 防衛省は昨年12月の名護市東海岸へのオスプレイ墜落事故に関わる米事故調査報告書を公表した。その内容たるや、これまでの米軍の説明と重大な点で異なる驚くべき報告書だ。事故原因について、説得的な説明は見当たらない。防衛省は「米軍が安全と言うから大丈夫」と言わんばかり。(3頁参照) ■9/27 沖縄防衛局は辺野古海域で絶滅危惧Ⅱ類の貴重なサンゴ14群体が見つかり、その内13群体がすでに死滅していることを公表した。生きている1群体

だけのサンゴ移植許可申請を県に提出するという。しかし73000群体ものサンゴの工事着手前の移植を求めてきた県の要望を無視してきたのは防衛局だ。13群体の死滅も工事の影響ではないと言い張っているが、説得力はない。移植許可は知事権限に属する。防衛局にとっては海底地盤の脆弱性に続く新たな難題だ。■10/10 辺野古の工事による岩礁破碎の差止め訴訟第1回口頭弁論が開かれ翁長知事が陳述した。知事は法見解を恣意的にねじ曲げて基地建設をすすめる政府防衛省の姿勢を批判し「無許可の岩礁破碎行為を放置できない。公正な判断を求める」と訴えた。第2回口頭弁論は11/14に予定されている。■10/11 高江で米軍ヘリが炎上爆発大破した。100mの距離に人がいた。250mの距離に民家もある。大きな事故で初めてヤマトのマスコミは、危険と隣り合わせの沖縄の現状を報道する。しかし軍事植民地状況を強いられ続ける沖縄の人々が、日常的にいのちと暮らしを脅かされていることに想像力を巡らすことこそが求められているのではないかと

(2頁) ■11/24 集会に多くの参加を！
■辺野古・高江カンパは2,302,055円(10/23現在)。引き続きカンパを！
郵便 00210-0-2021 沖縄連続講座

辺野古の海にも陸にも基地を造らせない！11.24集会

11月24日(金)18時半 横浜市開港記念会館

稲嶺市政誕生から8年。国家権力による「アメとムチ」を寄せ付けず国策に
対峙し続ける。翁長市議から「オール沖縄」の先駆けとなった名護市民の闘い
を話していただく。木元さんからは琉球列島の軍事化と日米軍事再編の報告

■お 話：翁長久美子さん(名護市議・軍事特別委員会委員長)
木元茂夫さん(すべての基地にNOを！ファイト神奈川)

■資料代：500円

■主 催：島ぐるみ会議と神奈川を結ぶ会



高江の牧草地で米ヘリ爆発炎上大破！証拠隠滅を許すな！

10/11（水）夕方、普天間基地所属の米軍大型輸送ヘリ CH53E が東村高江の牧草地に墜落炎上、大破した。米軍は例によって「緊急着陸」と表現し軽微な事故と印象づけようとしたが、数回の爆発で原型をとどめないほど破壊された残骸を見る限り、「墜落」としか言いようがない。米海軍安全センターは「クラス A」の重大事故と発表した。12日にシュローティ在日米軍副司令官と会談した小野寺防衛相は「事故原因と安全が確認されるまで同型機の運用停止を確認した」と公表した。

実はこの10/11には沖縄で米軍に関わる4つの出来事が連続して起きている。

①午後0時38分—59分、うるま市津堅島沖でパラシュート降下訓練強行。沖縄県、うるま市の中止要請は無視され、翌日も実施された。②午後1時ころ、金武町キャンプ・ハンセン内で実弾射撃訓練による山火事が発生。③午後3時すぎ、嘉手納基地にF15が車輪故障で緊急着陸。④午後5時すぎ、高江でヘリの墜落炎上大破。

これが軍事植民地・沖縄の現実だ。

今回の高江の事故について、いくつかの重要な事実を記しておきたい。

(1) 炎上大破の事故現場は民間の牧草地だった。事故の瞬間、現場からわずか100mの養豚場で89歳の西銘清さんが作業中だった。西銘さん一家の住む住居まで約250m。事故現場は牧草地の真ん中。息子の西銘晃さんは「牧草の収穫が1日長引いたから助かった」と語る。さらに400m西方には沖縄本島全域の約6割の飲用水を送水している福地ダムがある。4年前に宜野座村キャンプハンセン内に米空軍HH60救難ヘリが墜落した時には現場から70mの大川ダムの取水は1年間停止した。狭小な島の中での米軍機事故は命と暮らしを脅かす。

(2) 集落を囲むように新たに6基のヘリパッドが完成し、高江の住民は激しくなる飛行訓練の騒音に悩まされていた。この5年間で60デシベル以上の騒音回数が12倍超、夜間の騒音は16倍超に跳ね上がっている。オスプレイも含めた米軍ヘリの騒音と低空飛行に悩まされ、いつ墜落するか危険と隣り合わせの日常を強いられていた。この現実を見れば、「北部訓練場の過半の返還は負担軽減に大きく寄与する」という日本政府の言い分が嘘っぱちであることが誰でもわかる。「安倍政権にとっての『負担軽減』とは、『負担強化』の言い換えに過ぎない。」

(10/12 沖縄タイムス社説)

(3) CH53Eに使われている放射性物質ストロンチウム90が爆発的燃焼で牧草地周辺に飛散した可能性がある(矢ヶ崎克馬琉大名誉教授)。県環境部の職員が測定しようとしたが米軍に規制され現場に近づけなかった。この牧草地は5年前にヤンバルクイナ



の繁殖が確認された場所だ。環境汚染が危惧される。17日になって県環境部と沖縄防衛局は炎上地点を含む事故機周辺7地点で土壌サンプルをようやく採取できた。だがストロンチウム90の残留分析に必要な1地点1kgの採取が認められず、1地点100g前後しか採取できなかった。養豚場を運営する西銘晃さんは出荷先の県食肉センターから出荷停止を命じられ、約100匹の出荷を見送った(その後、出荷)。事故後のストレスからか、1匹が17日に死んでしまった。

(4) CH53ヘリは2004年の沖国大墜落と同型機。今年に入って4件の不具合が報告されている。1月に着陸装置前脚部の故障、翌日に異常音、2月に着陸装置故障、6月に久米島空港に緊急着陸。この久米島に緊急着陸したヘリが、今回の事故機だった可能性が指摘されている。事故は起こるべくして起こった。

事故後、高江区は12日夜の緊急代議員会でヘリパッド6基の使用禁止を求める抗議決議を採択。16日には県議会がヘリパッド使用禁止と民間地・水源地上空の飛行禁止を求める抗議決議を自民党も含む全会一致で採択。東村・国頭村・大宜味村議会、宜野湾市議会、県町村会などが続いた。

米軍は事故翌日の12日からCH53Eヘリの飛行を停止。「安全が確認されるまで運用停止」(小野寺防衛相)のはずが、17日の夕刻、沖縄防衛局が高江の住民説明会で謝罪した直後に米海兵隊が一方的に安全宣言、18日午前中からCH53Eは普天間を離陸し、あろうことか高江の事故現場の上空に、オスプレイとともに何度も姿を現し重低音を響かせた。小野寺防衛相は「誠に遺憾」と、間近に迫った衆議院選への影響を懸念して「不満」を装ったが、飛行中止を求めて米軍に抗議するわけでもない。昨年12月の名護東海岸でのオスプレイ墜落事故も、8月のオーストラリア沖の墜落事故でも、度重なるエンジントラブルの緊急着陸も、原因究明されることなく飛行訓練は再開されている。まさに「日米共犯」(10/18 琉球新報社説)と言うしかない。20日、県と沖縄防衛局の土壌採取を妨害するように、地主の了解もなく、トラック5台分の土壌を運び出してしまった。まさに証拠隠滅。現場には米兵の吸殻やガムが残された。

原因は「パイロットの判断ミス」? デタラメな米軍事故調査報告書

昨年 12 月の名護市東海岸へのオスプレイ墜落事故の米調査報告書が防衛省から公表された。原因は「パイロットの判断ミス」にあり「機体そのものの不具合」はない、と決めつける内容だ。日米両政府とも機体の安全性を強調することに終始しているが、調査報告書がそのことを立証できている訳ではない。報告書の問題点を 3 点指摘したい。

(1) 報告書提出まで、事故から 9 ヶ月も経っていること。日米の取り決めでは 6 ヶ月以内の報告書提出が義務付けられている。事故から 6 日後にオスプレイの飛行訓練は再開され、年明けには特に危険性が指摘された空中給油訓練も再開されている。次々と起こる事故・トラブルで墜落の記憶が薄れた頃に出され、原因究明されたとはとても思えない報告書が何の役に立つのか、誰のためにあるのか? 軍の論理が全てに優先しているとしか思えない。

(2) 218 頁に及ぶ報告書の「意見」「提言」の部分 5 頁が全て黒塗りとなっている。また事故についての面談や証言記録など 300 頁以上の資料が、米国防法に基づき公開すらされていない。防衛省は情報が十分開示されないまま、どのようにして「安全性」にお墨付きを与えることができたのか。米軍の結論を鵜呑みにしているだけではないのか。

(3) 報告書には米軍の当初の説明と異なる重大な事実が記載されている。

- ① 事故現場が「ホテル・ホテル訓練区域」内とされていたが、実際は訓練区域外の与論島沖約 15km の公海上だったこと。
- ② 空中給油中の事故は初めて、とされていたが、2 年前にも同様の事故が国外で発生しており、今回が 2 例目であること。
- ③ 搭乗員が 2 度にわたり「制御不能」を示す救難信号「メーデー」を發した事実を報告書が明記していること。これは米軍が説明している「制御された緊急着水」ではなく、制御不能な「墜落」である

った動かぬ証拠だ。米国防総省の国防分析研究所のレックス・リボロ元主任分析官は「米軍関係者がこの報告書を読めば、これが制御された着水だったと信じる者はいないだろう」と指摘した (9/14 沖縄タイムス)。

普天間所属の MV22 オスプレイは昨年 12 月の墜落事故のあとも、6 月に奄美、伊江島に緊急着陸、8/5 にオーストラリア沖で墜落事故 (3 人死亡)、8/29 に大分空港に緊急着陸、9/29 に新石垣空港に緊急着陸と事故、エンジントラブルが続いている。前出のリボロ氏は 1200 時間ごとの交換として設計されたオスプレイのエンジンが、「現在はおそらく 100~200 時間ごとの交換となっているのではないかと指摘している (9/3 琉球新報)。なお普天間所属以外の米海兵隊オスプレイでは 1 月にイエメン (3 人負傷)、7 月ノースカロライナ (1 人死亡、2 人負傷)、9 月シリア (2 人負傷) で「クラス A」の墜落事故が起きている。

そして 10/3、2000 年のオスプレイ墜落事故 (19 人死亡) の米兵遺族らが米国防総省と海兵隊を相手取り事故機の保守点検の情報開示を求める訴えをワシントン連邦地裁に起こした。米国の中からオスプレイの構造的欠陥を問う新たな動きとして注目したい。

▼9/12 琉球新報朝刊から



山城博治さんを囲む9.29神奈川の集いに200人参加!

9/29(金)の夜、「辺野古の埋立てを止めよう! 山城博治さんを迎えて—9.29 神奈川の集い」が、横浜市中区の情報文化センターホールで開かれた。主催は島ぐるみ会議と神奈川を結ぶ会・神奈川平和運動センター・基地撤去をめざす県央共闘会議。前日の臨時国会冒頭で、大義なき衆議院解散—総選挙に突入するという騒然たる政治状況の中での集まりだったが、会場ほぼ満席。200 人の参加者は沖縄タイムス東京支社報道部長の西江昭吾さん、沖縄平和運動センター議長の山城博治さんの講演に最後まで聞き入った。会場で呼びかけられた「辺野古高江派遣基金・神奈川」のカンパは 10 万円超集まった。(4 頁につづく)



「辺野古を止めれば南西諸島軍事化の輪が切れる。」(山城博治さん)

「島ぐるみ会議と神奈川を結ぶ会」の高梨晃嘉・代表世話人からの開会挨拶に続いて、西江昭吾さんが「報道現場から見た沖縄問題」のテーマで30分程度の講演。西江さんは1975年那覇市生まれ。1999年に沖縄タイムスに就職、中部支社を皮切りに、福田政権の時に東京支社に配属され、防衛省を担当。「2009年に鳩山政権下で迷走した時期は大変振り回された」と言う。第二次安倍政権になった時に沖縄に戻り基地担当、社会部を経て本年7月から東京支社に戻った。西江さんは辺野古の現状、差止め訴訟の見通しを述べ、政府防衛省の露骨な沖縄イジメと恣意的な行政を鋭く批判。「基地問題には保守も革新もない。沖縄では基地問題はイデオロギーの問題ではなく、生活問題」と強調した。

西江さんの講演終了後に結ぶ会から「辺野古高江派遣基金・神奈川」のカンパの呼びかけ。

続いて沖縄平和運動センター議長の山城博治さん登壇。山城さんは昨年3月の神奈川集会以来一年半ぶりの来県。その間、高江の激しい闘いと10月の不当逮捕、5ヶ月間の長期勾留と続き、今でも厳しい条件付きの保釈で裁判闘争が続いている。2年前には半年間の闘病生活もあったので、昨年来の激闘と弾圧の日々に体調を心配する声も多かった。ところが今回も、9月27日から東京で三つの大きな集会と防衛省交渉をこなした。久しぶりの神奈川への登場は、大きな拍手で迎えられた。

山城さんはまず「沖縄地元紙をつぶせ」という卑劣な攻撃に怯まず沖縄の声を報道し続ける沖縄タイムス、琉球新報の記者にエールを送った。

講演の一部を以下に紹介する。

与那国、石垣島、宮古島に自衛隊のミサイル部隊を配備する、南西諸島防衛という計画が進んでいる。北朝鮮のことすら手が負えないのに、軍事大国の中国に対して、三島からミサイルをぶっぱなす、そんな議論をしている。もしかしたら、辺野古や高江はダミーで、南西諸島の島々にミサイル基地を作ることが狙いなのかという不安を感じる。朝鮮のミサイルすら対応できないのに、中国に軍事力で向き合うなどんでもない。しかも拉致問題にせよ、中国の協力なくして北朝鮮の問題は解決できない。6カ国協議の枠組みが必要でしょう。日米で「中国にミサイルを向けましょう」という話をして、中国がわかりましたというわけがない。私たちは、今こそ平和を守るために、この国を守るために何が必要か、大胆に提

起していくべきだ。

沖縄大学の新崎盛暉さんが「安保反対とか、憲法守れ、で世の中は変わらないが、辺野古反対で安保が変わる」と言った。最大のキープポイントは辺野古だ。これを止めれば南西諸島軍事化の輪が切れる。辺野古の闘いで南西諸島の軍事化、日本の戦争国家化を止めたい。

昨日、国会で院内集会をして防衛省の職員と議論した。トラックが砕石を山盛りにして運んだり、ナンバーを見えなくしたり、違法なことをしている。砕石も洗浄しているというが、本当か。防衛省は「直接契約した業者ではないので現場を確認できない」という。間違いなくやっていない。洗浄してもその莫大な水が採石場に流れて、海に入る。環境破壊でしょう。普天間の返還条件の話もした。6/15に当時の稲田朋美防衛相が、緊急時に3000m滑走路を使わせてもらわないと、滑走路が短い辺野古の新基地ができて普天間の移設ができない、と言い出した。唯一の条件が辺野古の新基地だと言い続けていたのが、真つ赤な嘘だった。いい加減にしろ。県民を騙してきたのか。最初から普天間返還は辺野古新基地と那覇空港の滑走路が必要だと言っていたら、もっと反対は強かった。稲田防衛相が辞職せざるを得なかったのは、この密約をバラしてしまったからではないか。こんな恐ろしい密約がいっぱいある。

高江ではゲートに住民がテントを張り、平和運動センターの車両をバリケードにした。車が200万、アンプが100万、300万の車です(笑)。沖縄防衛局は7年間は手が出せなかった。ところが昨年、一事業者である沖縄防衛局が「テントと車両を撤去する」と言い出した。何の権限もない。北部訓練場の基地の中に県道72号を作ったのだが、今度は基地を作るために県道を潰そうという話になった。本当は沖縄県の土木事務所が権限を持っている。裁判所を通して撤去するしかない。経産省テントもそうだった。ところが高江では沖縄防衛局が何の権限もないのにテントとバリケードを撤去した。機動隊の暴力で排除した。いま裁判で、「被告席に着くべきは防衛局でしょう」と議論している。裁判の結果は厳しいかもしれないが、我々の正当性、高江と辺野古の闘いの歴史的意義を主張して歴史に残したい。

講演は約1時間。山城さんは「そろそろまとめます。歌を歌います！」と宣言。これには場内「待ってました」と笑いと拍手が広がる。「辺野古でいつも歌っている歌で気持ちをひとつにしたい」そう言って歌いだしたのは主催者が歌詞を用意した「沖縄今こそ立ち上がろう」「座り込め」ではなく「ケセラセラ」。続いて2曲も会場と一体となって大合唱。「えいやー！ありがとうございます！」の掛け声到场内は割れんばかりの大きな拍手。

集会後の懇親会は約30人参加。山城さんを囲んで交流を深めた。

